Roots of Active Person

[活躍する卒業生]

環境アセスメントで風力発電の未来を支える

一般財団法人日本気象協会 事業本部
環境・エネルギー事業部 環境アセスメント事業課

小山 和香 さん　環境科学部 環境生態学科 2012年度卒業
環境科学研究科 環境動態学専攻 2014年度修了

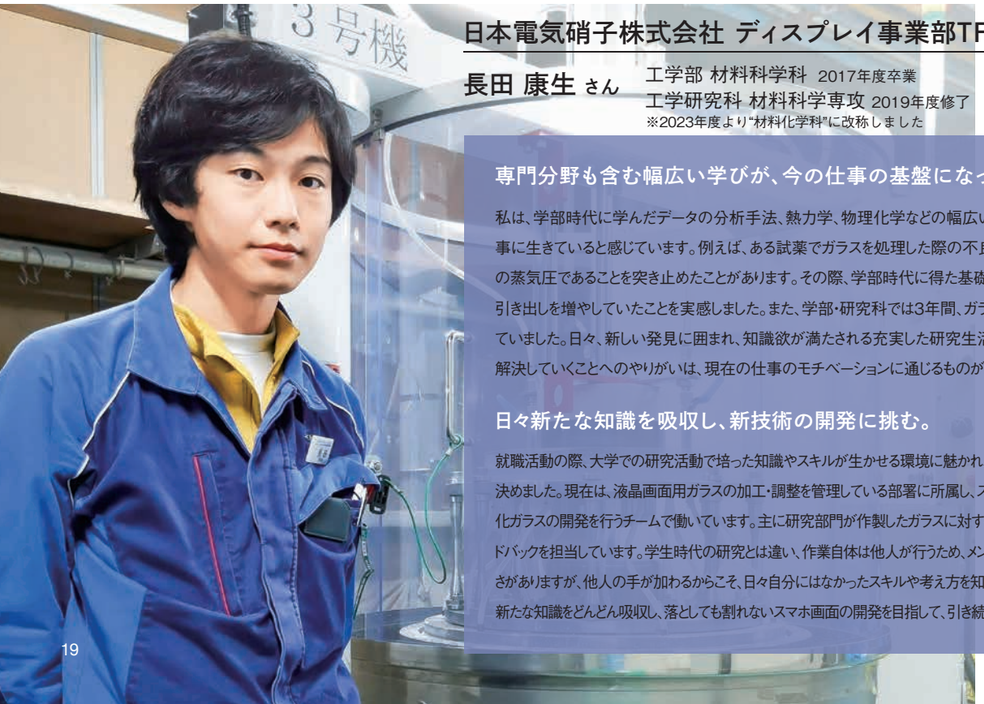
将来を見据えた課題解決に取り組む。

子供の頃から天気という自然現象に興味があり、入社を決めました。日本気象協会では天気予報はもちろん、防災や電力需要予測といった気象に関する幅広い業務を行っています。私の担当は、風力発電事業の環境アセスメント（環境影響評価）。風力発電所の計画地で現地調査を行い、事業による将来の騒音、動植物、景観などのさまざまな環境影響を事前に予測評価します。また、環境調査会社という中立的な立場から、電力事業者へのコンサルティング、行政機関との協議や住民への説明も行っています。環境アセスメントの手続きは最短でも約4年かかるため、将来を見据えて課題解決に取り組むことが重要です。各手続きの段階一つひとつを完了させる度に大きな達成感を感じます。

大学で培ったフィールドワークの経験が、今の仕事の礎に。

学部・大学院では水質分析の分野を研究していました。研究では琵琶湖を主なフィールドとして、少なくとも月に1回は色んな場所で調査を実施していました。このような実践的な経験が、現在の現地調査業務に取り組む基盤となっていると感じています。また、常に新しい知識を身につけ続ける姿勢を大学時代から変わらず大切にしています。技術の進歩とともに風力発電業界も変化しており、今後も知識と技術を常にアップデートして活躍の幅を広げていきたいです。

現代社会には欠かせない強化ガラスを技術で支える



日本電気硝子株式会社 ディスプレイ事業部TFT加工部

長田 康生 さん　工学部 材料科学科 2017年度卒業
工学研究科 材料科学専攻 2019年度修了
※2023年度より"材料化学科"に改称しました

専門分野も含む幅広い学びが、今の仕事の基盤になっている。

私は、学部時代に学んだデータの分析手法、熱力学、物理化学などの幅広い科学の知識が、今の仕事に生きていると感じています。例えば、ある試薬でガラスを処理した際の不良の原因が、特定の物質の蒸気圧であることを突き止めたことがあります。その際、学部時代に得た基礎的な知識が問題解決の引き出しを増やしていたことを実感しました。また、学部・研究科では3年間、ガラスの割れやすさを研究していました。日々、新しい発見に囲まれ、知識欲が満たされる充実した研究生活でした。わからないことを解決していくことへのやりがいは、現在の仕事のモチベーションに通じるものがあります。

日々新たな知識を吸収し、新技術の開発に挑む。

就職活動の際、大学での研究活動で培った知識やスキルが生かせる環境に魅かれ、日本電気硝子への入社を決めました。現在は、液晶画面用ガラスの加工・調整を管理している部署に所属し、スマートフォン画面用途の強化ガラスの開発を行うチームで働いています。主に研究部門が作製したガラスに対する評価や評価結果のフィードバックを担当しています。学生時代の研究とは違い、作業自体は他人が行うため、メンバーをマネジメントする大変さがありますが、他人の手が加わるからこそ、日々自分にはなかったスキルや考え方を知ることができます。これからも新たな知識をどんどん吸収し、落としても割れないスマホ画面の開発を目指して、引き続き取り組んでいきます。

憧れの管理栄養士として、患者さんに寄り添う治療を

大阪大学医学部附属病院 栄養マネジメント部

佐草 小夏 さん　人間文化学部 生活栄養学科 2018年度卒業
人間文化学研究科 生活文化学専攻 2020年度修了

在学中の実習が、将来を考える決め手となりました。

もともと食べ物が人に与える影響について興味があり、生活栄養学科を志望。病院の管理栄養士を目指すようになったきっかけは、在学中の臨地実習です。管理栄養士の皆さんが、患者さんと一緒に食事に関する困りごとを解決する様子や、他職種の方々と治療法について意見交換をする姿を目にしてこの職業を志すように。現在は憧れの管理栄養士として、食事内容の説明やアレルギーの聞き取り、食事調整などを行っています。患者さんの食べやすい食品や食事の形態を聞き取り、食事調整を繰り返し行ったことで患者さんが元気になっていく姿を見たときはとてもやりがいを感じます。

講義や近江楽座での経験。すべてが患者さんとの接し方に生きています。

現場では大学で培った基礎の大切さを実感しています。患者さんの多くは、単一の疾患だけではなく沢山の疾患を複合した方。そのような患者さんへの栄養介入を「病名」で考えるのではなく、「疾患同士の関わりや病態」で考える意識を持てたのは、先生方の講義やアドバイスのおかげです。また、在学中は「近江楽座」のおとくらプロジェクトにも参加。学生主体のギャラリーや喫茶の営業を通して、小学生から年配の方までさまざまな人たちと交流しました。病院にも幅広い年代の患者さんがいらっしゃるので、大学時代の経験が自身の支えになると感じています。

患者さんの視点に立ち、よりよい暮らしを提案できる看護師に

滋賀県立小児保健医療センター 看護部そらA病棟

小西 朝陽 さん　人間看護学部 人間看護学科 2016年度卒業

患者さん、ご家族、他部署の方々。多くの人とのつながりが仕事への活力となっています。

もともと子どもが好きだったこと、また、在学中に実習でお世話になったことがきっかけとなり、現在の職に就きました。主に難治慢性疾患をもつ子どもたちが自宅で過ごせるよう、ケアの工夫や地域との調整を行っています。病院でしかできない治療が多い中で、どのようなケアをすれば患者さんが自宅で過ごせるのか、他部署の方々とも連携しながら考えていきます。特にやりがいを感じるのは、患者さんが退院するとき。元気な姿で無事に家に帰れることになったとき、また、患者さんやその家族からありがとうと声をかけてもらったときの感動はひとしおです。

大学での多面的な学びが今の仕事の道しるべに。

大学では基本的な看護技術はもちろん、人間看護学科とあるように人を看護するという点で大切なことを多く学びました。特に心がけていることは、患者さんの立場になって考えること。在学中の実習では、子どもたちの感情を読み取ることが難しく、なぜ泣いているのかを理解することに苦戦しました。今は目の動きや呼吸の音など、ささいな反応からも子どもたちの感情を読み取れるよう日々努めています。大学の先生たちはとても親切で、今でも実習の時に会うと元気にしてるかと声をかけてくださいます。アットホームなところも本大学の魅力の一つです。